

# 酒とパソコンと少々のもろく

## バーニャ・カウダ

成光 昭男

暖冬の子想を裏切り、平年並みの寒さでしたが、啓蟄(けいちつ)を過ぎ、ようやく暖かくなってきて、新芽を食べる野菜や山菜が美味しい時期です。我が家でも、世の流行にならって、バーニャ・カウダで新芽を頂きましょう。

バーニャ・カウダはイタリアの冬の野菜料理なのですが、まだまだ寒さが残る早春に、新芽をこれで頂くのも良いものです。

「バーニャ」は「ソース」、「カウダ」は「熱い」を意味するようで、牛乳、生クリームをたっぷり使った、熱々のソースに野菜を浸して食べます。

### 我が家流バーニャ・カウダの作り方

#### 【材料】

牛乳200cc、生クリーム200cc、オリーブオイル200cc、アンチョビ1缶(45g)、ニンニク5～6片、白ワイン100cc

#### 【作り方】

- 鍋に牛乳、ニンニクを入れ火に掛けます。沸騰したら火を止めます。
- ミキサーに1とアンチョビを入れ攪拌します。
- 鍋にオリーブオイルを入れ、火に掛け、2を加え、沸騰したら白ワインを入れ、2～3分かき混ぜ、最後に生クリームを加え、良くかき混ぜます。
- 最後に、塩、こしょうで味を調えます。  
※アンチョビによって塩分が違いますので、配合量を調整してください。

さて、繁殖成績は、分娩後初回授精平均日数(初回授精)、発情発見効率、受胎率の3つの要因で決まり、その中で、初回授精を早めることが最も改善しやすい項目であることとはすでにご説明しました。

ただ、初回授精を早めても、直ちに空胎日数や分娩間隔が短縮するわけではありません。繁殖成績の改善の即効薬はなく、粘り強い取り組みが必要です。

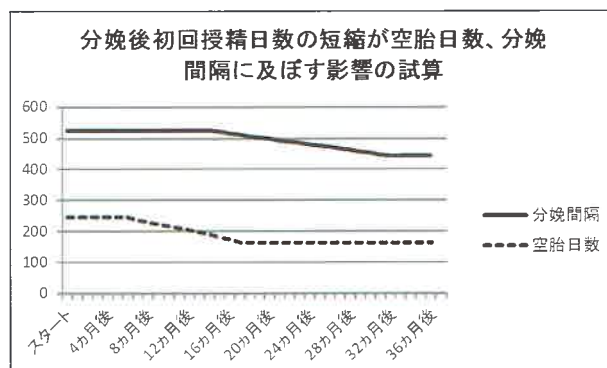
そこで、初回授精を早めてから、空胎日数や分

娩間隔が短縮されるまでにどの程度の期間がかかるかについて、試算を行ってみました。

#### 前提条件

- 新たにその月に分娩した経産牛の分娩後初回授精日数を160日から80日に短縮させました。
- 発情発見効率は50%、受胎率は40%としました。
- この条件で、改善前の空胎日数は244日、分娩間隔は524日、目標ではそれぞれ164日、444日としました。
- 経産牛を18頭(分娩間隔524日÷18月から)使い、1ヵ月単位で試算を行いました。

#### 試算結果



- 改善を始めて、7ヶ月後に空胎日数の短縮が始まり、17ヶ月後にすべての搾乳牛の空胎日数が目標の80日になりました。
- 分娩間隔の短縮は、16ヶ月後に始まり、すべての搾乳牛の目標の444日に達したのは32ヶ月後でした。

もちろん、発情発見効率や受胎率の改善を合わせて実行すれば、改善のスピードは速くなります。

ただ、繁殖成績の改善が目に見えて来るには、やはり相当な期間が必要です。それだけに、繁殖成績の改善には、1日でも早く取り組むべきではないでしょうか。